SONRISA

そんりさ

Vol.149

辺境のコロンビア・アワ民族

コロンビア・マグイのリーダー、ホセ・チンガルさん
＝柴田大輔さん撮影

02　辺境の故郷　コロンビア・アワ民族　…… 柴田大輔
08　エクアドル・インタグ鉱山開発問題と現状　…… 一井リツ子
11　ヤスニITTイニシアティブ　……訳・一井不二夫
15　ラテンアメリカのアフリカ系　……翻訳ワークショップ
19　ハイチ友の会・泣き笑いの結核検診奮闘記　…… 小澤幸子
22　ラ米百景番外編サパタを巡って　……山崎幸子
23　負の歴史と向き合うアルゼンチン児童文学　…… 宇野和美
24　セントロ・コスコ・デ・アルテ・ナティーボの功績…水口良樹
26　食巡り「牛肉とコーンチップスの丼」　……ミゲル・アクーニャ
27　ニュースクリップ　……サザエ

2014年7月12日　日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

辺境の故郷　コロンビア・アワ民族

柴田大輔

50年に及ぶ内戦が続くコロンビアでは、一昨年から始まった反政府ゲリラ「コロンビア革命軍」（FARC）と政府の和平交渉の行方が注目されている。そんななか、特に緊張が高まっていたのが南部のナリーニョ県だ。中でも先住民族アワの自治区マグイがある山間部一帯はエクアドルとの国境が近く、FARCの重要な活動地として2000年以降、軍の激しい攻撃にさらされてきた。2013年2月、私はマグイを訪れるためにコロンビアへ向かった。今年4月に日本へ帰国するまで、計３回で約7カ月を過ごした。

マグイなど、アワ民族コミュニティーが点在する山岳地帯

1.証言

「紛争は私たちの社会を破壊しました」。2013年11月、ナリーニョ県の太平洋岸の町トゥマコで政府機関が主催した紛争被害の証言集会があり、マグイから招かれた地域リーダーのホセ・チンガルさんは、そう状況を報告した。辺境に位置し、政府に顧みられることのなかったマグイが本格的に紛争に巻き込まれるようになったのは2000年以降。以来、5つの集落に224家族が暮らすマグイで少なくとも30人以上が死亡、または行方不明となった。一時は軍によるFARCへの攻撃の激化で住民の9割が避難民となった。周辺地域も含めると、この10年間で更に多くの人々が命を落としている。

そんなマグイを少しでも住みよくするため先頭に立ち、長年活動してきた人物がホセさんだ。地域の内外から大きな信頼が寄せられている。証言の最後に、聴衆に語りかけた。「私たちの故郷が壊されるのをもう見たくない。これ以上、もう誰にもここから去って行ってほしくありません」。誰もがじっと耳を傾けていた。会場に来ていた人の多くが、それぞれに紛争体験を持っていた。

2.マグイへ

2013年2月。私はホセさんに連れられ、初めてマグイを訪ねた。私は以前に2度、2009年と2011年にマグイに入ろうとしたことがある。その時は情勢が緊迫していたことと、何より地元の人の信用を得ることができずに失敗したが、2011年に偶然ホセさんと知り合い、連絡先を交換していた。今回はコロンビアに着いてすぐ、ホセさんの連絡先に電話をした。マグイに行きたいと伝えると、「今は治安が落ち着いているので、一緒にいくなら来ても構わない」とのことだった。私のことを覚えてくれていたことにホッとし、嬉しくなった。

山の中にあるマグイへは、麓の町アルタケルから徒歩で4時間かかる。その間に幾つかのアワ民族が暮らす集落が点在する。アルタケルからマグイへ向かうと最初の集落ベガスに着く。そこまでは車がなんとか入れるが、その先は徒歩か馬だ。地元の人たちは山を歩く際の距離を「半日」「1日」と歩く時間で表現する。エクアドル国境までは「2日」だ。

ホセさんと共に、山奥へ続く一本の道を歩いていく。目の前に広がる、美しい緑に覆われた深い山々に目を見張った。幾つもの沢が山肌を流れている。「どんな作物も良く育つ、豊かな土地だった」。以前に、マグイを去った避難民の老人から聞いた言葉を思い出す。

アワの人たちは地元で作られるチャピルというサトウキビの蒸留酒を飲みながら山を歩く。アルコール度数45度の強い酒だ。これを飲むと力が出て、早く目的地に着くという。チャピルが好物のホセさんは嬉しそうに私に説明しながら、チャピルが入ったペットボトルのキャップに注いで私に飲ませると、自分もクッと一息に飲み干した。

道をすれ違う人たち同士は、ほとんどが顔見知りだ。週末には買い出しにアルタケルへ向かう多くの人が行き交う。人々はすれ違う度に足を止める。「（アルタケルに）出て行くの？」「そうだよ。そっちは戻ってきたの？」という会話が挨拶代わりだ。少し立ち

㊧犠牲となった仲間が地雷を踏んだ場所に立つホセ・チンガルさん　㊨2012年12月2日の空爆によって地形が変わった山

話をして「また明日」といって別れる。チャピルを持っていれば、そこで何度か杯を交わす。チャピルで力が出る、と言うよりは、長い道のりを楽しい気分で歩くことが力になるのかとも思った。途中で酔いつぶれて歩けなくなっているおじさんを見かけることもままある。

マグイへ向かう道中、残された紛争の跡を示して、ホセさんは説明してくれた。住む人が去った家々、FARCと軍の戦闘の起きた場所、FARCに一家全員が殺害された場所、地雷で人が亡くなった場所――。

道沿いの山肌に、小さな穴が空いているのが目に入った。1つではない。2、3メートル間隔でいくつも続く。「以前、軍との緊張が高まった時、FARCによって小型の爆弾が埋められていたんだ」とホセさんが話す。爆弾が仕掛けられるのは夜の6時から早朝6時まで。爆弾から伸びる紐が道を這い、紐に足をかけると爆発する仕組みだった。動線でつないで離れた場所から爆発させるものもある。危険なため、夜間の往来はしないよう住民に協力が求められていたが、この爆弾の犠牲になった住民もいる。

爆弾が仕掛けられなくなったのは、2012年12月2日の軍による大規模な空爆の後からだった。当時、マグイ内の山林にFARCの兵士が野営をしていたという。午前1時頃、いくつかの爆撃機が低い飛行音を谷間に響かせ現れた。FARCの野営地上空に辿り着くと、明け方4時ごろまで激しく爆弾を落とし続けた。この攻撃で25人以上のゲリラ兵士が殺害された。その中に、マグイ周辺を拠点としていたFARC機動部隊マリスカル・スークレの司令官もいた。

空爆の後、ゲリラはマグイを離れ、エクアドル国境近くへと拠点を移している。これにより地雷は仕掛けられなくなった。以降、マグイでのFARCの影響力は低下したとみられる。例えば、それまでマグイが毎年払わされていた「革命税」を2013年は払わずに済んだと聞いた。これまでゲリラにより携帯・カメラ等の通信機器の持ち込みが厳しく制限されていたにも関わらず、写真を撮ることを目的とした私が入ることができたこともその一つだという。これはとても大きな変化で、空爆以降、一気に携帯電話が集落内に持ち込まれた。今ではほぼ一人一台に近い状態だ。2013年後半、FARCが戻って来てからも、この変化が後戻りすることになっていない。

3.マグイの学校

マグイを含めアワ民族が暮らす一帯はコロンビアの辺境にある。長い間、中央から顧みられることがなかった。車が入れる道路がないのは前述したが、マグイに電気が通ったのは３年前だ。他の多くの地域には未だ電気は通っておらず、懐中電灯と石油ランプが夜の屋内を照らしている。

そんなマグイに初めて小学校ができたのは1960年代始めのことだった。地元の人たちの手で山から木を切り出し、校舎を建てた。教師は生徒の父兄が町で適任者を探し、お金を出し合い賃金を払っていたという。

だが、小学校から上へ進学するには町に出るしかなかった。山間の家からは遠くて通えず、下宿しながらの生活になる。費用がかかることや、親世代に就学の習慣が根付いていないことから、進学しない子どもが多かった。

また、町では先住民族以外の人々が多数を占め、文化も山とは違う。以前は今よりアワに対する蔑みが強く、言葉や生活習慣の違いをバカにされたという。マグイでは50年前は全員が話していたというアワ語だが、現在は日常的に話す人は一人もいない。背景にあるのが、町に出た時に蔑まれた経験だ。かつてはアワ語を使っていた年配者も今は話すこと嫌う。話すことが「恥ずかしい」と思っているのだという。だから子どもにはスペイン語だけで接するようになった。町の生活に馴染んでいこうとすれば、それはアワの文化を捨てることも意味していた。

そして現在。マグイには小学校から高校までをカバーする学校がある。「山で暮らすアワの子どもたちが誇りを持って生きていけるよう、先住民族のための学校を作りたい」。そんなホセさんの夢が実を結び、90年代初めに設立された。この地域一帯で唯一、山間にある先住民族のための学校だ。校名を「インガル・アワ」という。アワの言葉で「山に生きる人」を意味する。

学校をはじめ、地域がどう未来へ向かって進むべきなのかをホセさんは考え続けてきた。アワとして誇りを持って生きられる故郷を作りたい。その夢を地域の内外で語り続けることで協力者を得て、学校の他にも道路などを一つ一つ実現していった。彼の情熱に多くの人が引き寄せられてきた。マグイの学校で初代校長を務めたイバン神父もホセさんらとともに積極的に活動してきた一人だ。「ホセさんは常に夢を持ち、将来を見据えた大きな目標がある。私はそれに協力した」。神父はそう話した。

4.アワとして生きる

ホセさんの情熱はどこから来るのだろう。

ホセさんは1955年9月1日、ナリーニョ県の高地の町コルドバで生まれた。両親はマレスという先住民族だ。ホセさんの姓のチンガルは、マレス民族やエクアドルの先住民族の人々に見られるという。

コルドバは先住民族と白人の混血であるメスティーソが住民の大半で、マレス民族自身も言葉や習慣など独自の文化をすでに失っていた。当時、自分たちが「先住民族」という意識は薄かったようだ。

ホセさんは幼い時に両親が別離し、母親に育てられた。コルドバの小学校を卒業し、日本の中学校に当

マグイの学校に、念願の顕微鏡が届いた。15年務めるヘンリー先生が生徒に使い方を教える

たる学校には入学したものの、すぐに行かなくなってしまったという。学校では周りの子どもたちに「チンガル」という姓を先住民族と結びつけられバカにされた。それが悔しくて悔しくてたまらなかったのだ。12歳の時にカケタという近隣の県へ親類を訪ね、農場などで働き始めた。仕事を覚えれば大人も子どもも同一に扱われ、賃金が貰える。彼は学校に興味を失った。

ホセさんが18歳まで過ごしたカケタ県はアンデス山脈の東側に位置し、幾つもの大河が熱帯雨林地帯を横切る。河の周囲にはインガという先住民族が暮らしていた。そのインガの人々とホセさんは一時期生活を共にした。独自の言語・文化の中で生きるインガから多くを学んだという。数多くの薬草の知識、狩猟の仕方、作物の栽培方法。長い歴史の中で積み上げられた民族の経験が、生活の中に息づいていた。

ホセさんは18歳でカケタを離れ、好奇心に任せて各地を渡り歩いた。国境を越えてエクアドルでも暮らした。仕事は行く先々で見つけた。大工、農場、パン屋。どんな仕事も楽しくて精一杯取り組み、気が付くと色々なことができるようになっていた。友人もあちこちにできた。

生まれ故郷のコルドバを離れてからの生活で「人はどう生きるのかを学んだ」とホセさんは話す。「地域によって違いがある。そこで起こる問題にも違いがあるということも身体で感じた」。この経験が地域のリーダーとして活動する今に通じている。

20代半ばになって、母親が暮らすコルドバに戻った。大工の仕事で近隣の高地の町クンバルへ行った際、夫人のロサさんと出会った。ロサさんの両親は

クンバル出身だが、1950年代に住みやすい温暖な土地を求めてマグイに入植していた。ロサさんも両親と共に幼くしてマグイへ移住したが、クンバルに残しておいた家に戻っていた時にホセさんと知り合ったのだそうだ。

ロサさんと結婚したホセさんはマグイで暮らし始めた。土地はロサさんの父親から土地を譲ってもらった。当時30歳。農業を営む暮らしは未知のこと。何もわからなかったが、周りに暮らすアワの人々は作物の種や鶏を分けてくれた。ホセさんは、ここで子を育て、根を張り始めた。山での暮らしを懸命に覚えていくホセさんを、アワの人々は受け入れた。「今でも感謝している。恩返しをしたいと思って生きている」とホセさんは言う。「地域の先頭に立って仕事をしていくことに迷いはない。私はアワではないけれど、今はアワとして生きている」

5.紛争

平穏だったこの地域は、どのように紛争に巻き込まれていったのか。マグイに反政府ゲリラが本格的に入って来たのは1990年代中頃。FARC（コロンビア革命軍）とは別のELN（国民解放軍）だった。80年代に、別のゲリラM-19が来てはいたが、通過するのみだったと聞いた。ELNが来た時期については人によって記憶に違いがある。マグイが先住民族自治区として登記された94年という人もいれば、それ以前だという人もいる。だが、この前後であったことは確かなようだ。人々の話を総合すると、概ね次のようだった。

ある日、ELNの主要なメンバーがマグイにやってきた。マグイ住民の代表による、コミュニティーの意思決定機関である評議会と接触して「私たちはコミュニティーと協力して地域のために働いていきたい」と申し入れた。ELNを受け入れるかどうか話し合いが行われ、受け入れることになった。

彼らは武器を持っていたが、地域で戦闘が起きることはなかったという。政府軍が山に入ってくれば、ELNの兵士たちは軍が去るまで別の場所へ移って衝突を避けた。ELNは近隣の資産家から道具と資金を提供させ、地域の活動に回していた。ある時はその資金で牛を買い集め、共同体の住民による共同牧畜を始めた。牛を売ったお金は各家庭へ均等に分配された。地域の指導者や教師、外部からも弁護士や大学教員などを募って政治をテーマに勉強会を開いたこともあったという。

マグイを運営する、住民代表による地域評議会

だが、2000年になると、FARCが地域に入ってきた。ELNとの戦闘も起きた。マグイはFARCの勢力圏に置かれたが、一帯で見ればFARCとELNがモザイク状に場所を分けあう形となっていた。

FARCは独自の「山の法」を敷いていった。通信機器の持ち込みを禁止したのもこれによる。それでもまだ、住民に対する縛りは緩やかだったようだ。だが、2002年、対ゲリラ強硬派のウリベが大統領に就任すると、ゲリラへの攻撃は激しさを増した。住民の話を聞いていると、この時期からFARCが大きく変質したようだ。軍と繋がりのある、あるいは繋がっていると疑われた人を容赦なく殺していった。ゲリラに反する行動を取る人に対しても、見せしめ的に本人だけでなく家族までも殺害することもあった。

一方の政府軍は、山で暮らす人々をゲリラ、または協力者と決めつけていた節がある。ヘリコプターがアワ民族の地域に低空飛行で入ってくると、無差別に民家を銃撃した。屋根に銃痕の残る家がやたらとあるのはそのせいだ。2004年にはマグイの小学校が軍の空爆を受けて大破した。早朝で児童は登校前だったため、死傷者が出なかったのは幸いだった。軍が住民不在の家へ上がり込み、無断で物を持ち去り、家畜を食ったという報告も少なくない。激しい攻撃を恐れて町へ逃れた人々の中には、避難民として名乗り出ることを嫌った人もいる。山から来たゲリラの協力者と疑われ迫害される危険があったからだ。

右派民兵も人々を弾圧した。現在、ウリベ前大統領も含め、当時の政府関係者との癒着が告発されてい

る。政府は民兵を使ってゲリラに攻撃を仕掛け、ゲリラの協力者と思われる一般の人々を迫害させた。実際、農村を歩いていると、軍と行動を共にしていた、頭髪の長い、髭を生やした武装グループの証言を耳にする。軍の兵士は全員が坊主頭で髭を蓄えることはない。人々と話していると、軍、警察と民兵が同一視されているのが分かった。

アルタケルで商店を営むある夫妻は、娘がELNに入隊した。本人の意思かどうかはわからない。軍は夫妻をELN協力者と見なし、町から去るよう圧力をかけ始めた。気にしないように努めていると、ある日、夫妻が営む商店に民兵がゲリラ兵士を連れてきて、店の前で銃殺した。更に数日後、ちょうど店を閉めて少し離れた畑に行っている間に、やってきた民兵が店に火をつけた。店に隣接する自宅にも延焼した。この町には警察施設があるが、民兵の行動を黙殺していたという。夫妻はその後、エクアドルへ亡命。3年間、避難民として生活したが、日雇い以外に仕事がなく、生活に疲れ、状況が落ち着きを見せたアルタケルへ戻ってきた。

2005年に息子を失った母親にも話を聞いた。当時15歳だった彼女の息子が山で軍の兵士と鉢合わせた。息子は恐怖から逃げ出すと、後ろから銃撃され倒れた。一緒にいた友人が背負って母親のもとまで連れてきたが、間もなく息を引き取った。逃げ出した理由について「身分証を持っていなかったため、軍に自分の身分を証明できないことを恐れたのではないか」と母親は言う。他にも、ただ山を歩いていただけで軍から発砲されたという話も聞いた。

マグイでは2006年に紛争のピークを迎えた。FARCが活動するマグイとその周辺に対し、10日間にわたって軍が空爆した。この時、軍が兵士を山に送り込もうとする直前に、FARCによって全ての道に地雷が埋められたという。その前日、FARCは住民に逃げるよう警告を出し、住民の9割以上が避難民となって山を下りた。逃げられなかった人の中には、家族に病人を抱えていたり、外の社会での生活を怖れたりする人がいた。

山を下りた人々も、持っていったのは必要最低限のものだけだった。町での生活に馴染めず、数カ月で山に戻った人もいれば、いまだに戻っていない人もいる。集落から離れていた間、人々は貴重な財産である作物の種や家畜を失った。畑に地雷を撒かれ、入ることができなくなった人もいる。この経験が、その後は戦闘があっても外部へ出たがらない理由となっている。

避難民生活を送るマグイ出身の老夫婦

6.和平交渉の今

現在、コロンビアでは反政府ゲリラFARCと政府の和平交渉がキューバで続けられている。FARCは5つの項目を提示し、その3つでこれまでに合意が成立した。私の知人は、これまで決裂してきた和平交渉を思い出しながら、期待を交えつつも少し斜に構えて眺めている。ほとんどの人は、この延びきった紛争にうんざりしている。「国もゲリラもいらない。我々は自分たちで将来を築いていく」。ある先住民族指導者はそう話した。

私が先住民族コミュニティーで出会った17歳の少女は、かつてELNの兵士だった。ゲリラ兵士に恋をし、彼を追って入隊した。後に妊娠がわかり除隊。出会った時は赤ちゃんを抱きながら学校に通う高校生だった。

その自宅を訪ねたことがある。赤ちゃんにおっぱいをあげながら彼女はこう言った。「日本には戦争があるの？コロンビアではコロンビア人同士が殺し合ってるのよ。馬鹿なことだと思う」。彼女のボーイフレンドはその後、ゲリラを抜けエクアドルへ逃げたという。今は何をしているのかわからない。

この戦争は誰のためのものなのか。誰かを幸せにしたのか。

2013年11月6日、FARCが政治参加することで政府との間で合意した。しかし、その同じ日、ナリーニョ

県内4カ所でFARCは警察施設を襲撃している。更に、私がマグイに滞在していた2014年1月から2月にかけ、マグイでは軍と、2013年後半に地域に戻ったFARCとの間で衝突が続いていた。避難する人々も一部に出たし、学校を始められないという事態にもなった。

今年6月には、もう一つの反政府ゲリラELNが政府との和平交渉をスタートさせるという報道があった。しかし、ゲリラが武器を置いたとして、それが平和につながるのだろうか。解体されたと言われる右派民兵は形を変えて各地でその勢力を伸ばしている。新自由主義政策を進める社会は今もなお、弱い立場の人々を置き去りに「発展」を掲げて邁進している。暴力の原因は解消されていない。

7.故郷

今回、私がマグイを訪ねたのはなぜか。私は2007年、エクアドルで避難民として生活するアワの人々に出会った。彼らの多くがマグイ出身者だった。

初めは「避難民」「先住民族」としての彼らを見ようとしていた。それは、私自身が持ち込み、相手に押し付けたイメージでしかなかった。その後、私は毎年のように彼らを訪ねるようになった。その度に、これまで知らなかった一人ひとりの思い、経験に触れた。私と何ら変わらない一人の人間としての姿が胸に迫ってきた。

彼らは自分たちの故郷のことを聞かせてくれた。これまでどう生きてきたか。そこがどんなに住み良い土地だったか。温暖な気候、豊かな水と緑、良質の土。その環境で、自分の土地に好きな作物を作って生きる喜びを活き活きと語っていた。

山の生活、仕事、食べ物、天気、日々のこと、彼らの語る言葉を同じように自分も使って語り合いたいと強く思った。いつしか、マグイを訪ねることが私にとっての生きる力になっていた。実際に訪ねると、その言葉の通り、美しい山々に抱かれ人々が生活していた。

ホセさんの後を歩いて初めてマグイに向かった日。地元の人なら4時間で着く道のりを、私はすでに7時間歩いていた。「ダイスケ、あと少しで着くぞ！　頑張れ、チャピルが足りないな！」。ホセさんは全く疲れていないようだ。最後に延々と続く急斜面を登り切ると、立っていられないくらい足がガクガクした。山歩きに慣れていない上に、ちびりちびりと飲んでいたチャピルがすっかりまわり出していた。暑さと酔いで喉がカラカラだった。

元反政府ゲリラELNの兵士だった少女

沢のそばで少し休んだ。ホセさんが沢に顔を突っ込み、水をがぶりと飲んだ。とても旨そうだった。私も顔を突っ込み水を飲んだ。なんて冷たい水だろう。めちゃくちゃ旨かった。そのまま頭を水の中に沈めた。

顔を上げると、目の前がパッと開けた気がした。山々に聞いたことのない鳥の鳴き声が響いていた。深い木々の隙間から、夕日に染まりつつある赤い空が覗いていた。やっとマグイにこれたんだ。疲れている場合じゃない。私が歩いてきたこの道を、これまで出会ってきた避難民の人たちは毎日歩いていたんだ。この水を飲み、空気を吸って生きていたんだ。精一杯感じなきゃいけない。

「もう一杯飲め！」。ホセさんが勧めるチャピルを一息にのみ、ふらつく足で、再び歩き出した。そんな私を楽しそうにホセさんは見つめていた。

エクアドル・インタグ鉱山開発問題と現状

一井リツ子

現在、アンデスの裾野に位置するエクアドル・インタグ地方、この世界的にも最も豊かな生物多様性に富む雲霧林（世界の熱帯雨林の中でも2.5%、地球上の25の環境ホットスポットの2つを有する）の土地でエクアドル国営鉱山開発公社ENAMI（エナミ）とチリ国営銅開発公社CODELCO（コデルコ）による鉱山開発（銅・モリブデン）が強行されようとしている。2009年には新鉱山法の成立により、鉱業指令で事実上停止状態にあった鉱山開発の再開を決め、国家管理の強化を謳っている。

エクアドルでは鉱山開発関連技術や知識が不足しており、銅の開発では世界最大級であるチリの国営企業CODELCOに実際の採掘を頼る形だ。CODELCOは2011年には世界の銅の10%に相当する1億7900万トンの銅を生産精製し、銅鉱石では世界シェア１位、モリブデンでは２位という大きなシェアを持ち、世界の金属資源メジャーといわれる企業の１つである。CODELCOは2000年にもこのインタグでの開発を示唆しており、2008年から2011年までの3年間で300万ドルをエクアドルの探鉱事業に投資している。2011年には国営鉱山開発公社ENAMIと探鉱協定の継続を正式に合意。この合意により、今後4年間CODELCOは1000~3000万ドルのさらなる投資が可能となっている。この協定の枠内でCODELCOは工事可能な土地の約20か所で予備調査を行い、最終的にインタグのジュリマグア地区がその開発予定地とされている。（以前カナダのアセンダント社が取得した採掘権Golden1,Golden2,Magdalenalの一部が含まれる）フニン村を含み、チャルワヤク・バホ、チャルワヤク・アルトまでがその範囲となっており、これまでENAMIは鉱山開発に関する説明会を複数の町で行っているようであるが、地域住民の賛成を得られていない。地元住民の自由意思による事前の同意は不可欠で、同意のとれないままの開発行為は鉱業法の規制を犯している。

インタグでは1990年代に日本/JICAに委託をうけた三菱マテリアルが試掘を行い、河川の汚染・皮膚病などが発症したが賠償などは一切なされていない。2004年からはカナダのアセンダント・コパー社（現コパー・メサ社）による反対派へのいやがらせや脅迫・暴力行為などが横行し、住民の賛成が簡単に得られないのは当然ともいえる。しかし、インタグ開発予定地周辺では、水力発電所の建設や道路設備など鉱山開発には不可欠なインフラ整備が着々と進められている。

「エクアドルの運命は鉱物資源とともにある。鉱山開発なしに我々の社会に未来はない」「鉱山開発は社会構造を強化し、人口流出や地域社会の崩壊を抑制します。」という国営鉱山開発公社ENAMIは、インタグの学校でも催しを行い、子どもたちに鉱山は社会へ有益だと教えている。この鉱物が枯渇したのち、世界各地で同様な事例が数多くみられる長期環境汚染や廃墟となり打ち捨てられる土地の姿は、彼らの脳裏には映らない。枯渇性資源と地球環境価値という問題、そして循環する経済や社会システムについて、目先の安易な利益から離れ、長期的な目線で本質的な解決策を探るべきではないのか。

しかし「市民革命」という名のもと市民のための生活向上などを掲げ、表面的には反米姿勢をつらぬくコレア政権は、中国に頼る債務の返済を地下資源の供給でまかなおうとして、インタグ同様、その生物多様性で知られるヤスニ国立公園の石油採掘の実施を決めるなど、各地で強権的な開発姿勢をあらわにしている。

エクアドルの若者らを中心とした環境保護運動グループYasunidos（ヤスニドス）はこの石油採掘の是非を問う国民投票を求め、必要とされる以上の75.6万もの署名を提出したが、全国選挙評議会（CNE）は約35.9万のみの署名を有効とし、国民投票は不可となった。この間、署名の集計が慣例ではない軍施設に持ち込まれる、書類提出に必要な身分書の多くが紛失する、彼らの提出した書類には不正行為があるというCNEの説明など腑に落ちない部分も多い。これに対しYasunidosは恣意的に署名が無効にされたと主張し、双方とも法的手段をとると表明し緊張は高まっている。インタグは、このYasunidosとも連帯

している。

2014年の地方選挙で都市圏を中心に大きく票を失った与党には、何かしらのあせりも感じられる。開発に反対する住民は政府によりチェックされ、身元を調べあげられ公の場で「発展を阻害する民衆の敵」として名指しで大統領本人に批判されている。日本でいう秘密保護法のような法律も施行され、政府批判をすると「反逆罪」とされるなど開発反対運動の犯罪化が進行している。

ガルシア・モレノ共同体評議会代表ポリビオ・ペレス氏は、事前に諮問を行う権利・抵抗する権利が憲法で保障されていると述べる。2008年に施行されたエクアドル憲法では同様に「自然の権利」「よく生きる権利」が明示され、この概念は世界へ誇るべきものだ、これまでヤスニITT提案といった環境・先住民保護的政策を打ち出し進歩的な姿勢で多くの希望を抱かせていたコレア政権の、現在の開発主義の傾向、独裁化への落胆は大きい。

2014年4月10日にはこの開発予定地内に位置するフニン村村長ハビエル・ラミレス氏＝写真右＝と、同行していた反鉱山開発運動のリーダー格でもあるポリビオ・ペレス氏が内務省大臣に招待された会合の帰り、罪状もなしに逮捕された。ポリビオ氏は一時拘束後釈放されたが、ハビエル氏はENAMIに「石を投げた」としてテロリズム・反乱罪として訴えられ90日の拘留が決定している。

事の起こりは、ENAMIの車両がスピードを出しすぎ住民2人を軽くではあるが轢き、ENAMI作業員がアジャコ・アルトの女性から叩かれた。これらの出来事から負傷者は出ていないが、ENAMI車両のフロントガラスが破損した。この日ハビエル氏は医者から命じられ自宅で療養していたという。現地環境保全団体DECOINは「彼はいかなる反乱的な行動にもかかわってこなかったし、いかなる衝突にも、共同体間、ENAMIの職員、あるいはいかなる公権力のものとも衝突に関係したことはない。」と証言している。彼の弟のウーゴ・ラミレス氏にも逮捕命令が出ているが今のところ拘束されていない。逮捕当日、彼らを招待した内務省大臣は前回のアセンダント社の裁判の際、当時住民側の弁護士をしており彼らとは旧知の仲だった。彼らはこの会合の帰りに拘束されたが、なぜ一般のバスにもかかわらず彼らが乗っ

ていることがわかったのか、など、この逮捕に関しては懐疑的な部分も多く、この逮捕が開発と無関係だとは考えにくい。この出来事が彼らへの裏切り行為だとする記事も見受けられた。

ハビエル氏は現在イバラの留置所に収監され90日の拘束が決まっている。この拘束期間が決定したとき彼の妻はその場に倒れ、普段は気丈な母親も泣き崩れ、4人の子どもらの1人は「お父さんが戻るまでご飯を食べない」と言って食事を拒むようになっている。この90日間の拘束後、本裁判が行われるが「反乱罪」の場合、最高10年以上の刑もありえるという。この現在、この鉱山開発の多大な影響を受けるフニン村の村長ハビエル氏の自宅には監視カメラが取り付けられ、家族はまともな日常生活を送れず自宅を離れていて、この間の家族の心労は図りしれない。

私はたまたま昨年2月にこのインタグを旅した際、このハビエル氏に日本の三菱マテリアルが汚染した試掘地まで案内してもらった。往復9時間の山道は、うっそうと茂った植物で途中から道も失われ、彼はナタで木々をはらい、雨の中増水した川で手作りの橋をかけ渡してくれた。ドロドロのぬかるんだ道に足を取られながら、なんとか試掘地に到着できたのは彼のおかげだった。温厚な人柄の彼に、試掘により周辺の苔も黒ずみ、現在もヒ素や重度に酸化した銅など重金属の混入により汚染した川を目にして、私達日本人がこの汚染や開発の原因をつくってしまったことを謝ると「でも君たちはこうやっ

て知ろうとしてくれているし、助けてくれる人達もいるから…」とはにかみながら答えてくれたのが印象的だ。彼はこの自然や村を守るべく、地道に鉱山開発に異議を唱えつづけてきた。

私は彼の母親であるロサリオ・ピエドラさんにも、前回のカナダ・アセンダント社の暴力的な参入に抵抗する住民たちの奮闘する姿を語ってもらった。彼女は現在息子を逮捕され、以前、夫も住民間のいざこざにより亡くしている。度重なる開発による恐怖、引き起こされる住民間の不和など、永年にわたり様々な苦痛を味わい、彼らの人権・コミュニティ、自分達の土地で穏やかに暮らしたいという当然の願いさえも鉱山開発は破壊してゆく。

2014年5月8日には200~300人規模の警察隊（特殊作戦部隊/GOEの指揮のもと、介入救出部隊/GIR、国家警察が参加）に守られた鉱山業者らが強行突入し＝写真右＝、このフニン村の入り口で住民のバリケードを突破した。この際、このロサリオさんは暴力を振るわれ、地面をひきずられ腹部を棍棒で殴打された。ハビエル氏の妻イリアナ・トルレスさんらも一時逮捕されている。「開発ではなく生命を！」「我々はテロリストではなく農民だ！」という文字がフニン村の入り口に見受けられる。この警察隊の侵入は水質・土壌などのサンプリングといった環境調査を目的としていたが、これによりENAMIが試掘許可を得るための申請が可能となり、報じられる9月の開発着工は進行してゆく。警察隊はフニン村に常駐しており、一時は各地で警察の検問が行われ占拠状態となり、地域住民は自宅にひきこもりがちで、子どもたちの心理的問題が不安視されている。政府側は環境に配慮した開発を唱えられてはいるが、ここでは露天掘りという環境破壊が非常に激しい採掘スタイルが想定されていて、これによる森林伐採、落盤、基準値の100倍を超える重金属による水源地汚染、化学物質処理の不備、選鉱過程で発生

する99.3%の廃棄物・汚染水貯水池の集中豪雨など自然災害による有害物質の流出、生態系・絶滅危惧種への影響、健康被害、コミュニティの離散、治安の悪化と、懸念事項はあとを絶たない。

こうした状況に対して全国規模の先住民族組織CONAIEはインタグへの支持を表明し、日本側でも、永年インタグの鉱山開発に反対し住民支援を行ってきた環境・文化NGOナマケモノ倶楽部は、ハビエル・ラミレス氏の弁護費用のための募金や、彼の即時釈放と武装警官隊を伴った国営鉱山開発公社のフニン村からの退去を求める署名を呼びかけており、2014年5月16日にはエクアドル大使館へ同様の抗議文（賛同26団体）を提出している。私達も連携し関連団体と実行委員会を立ち上げ、エクアドル・インタグにおける住民の取り組みや鉱山開発問題の危機的状況を伝えるべく緊急集会の開催や、エクアドル政府への抗議に賛同をつのり国内外の報道機関への情報発信を行う予定だ。これまで住民の力で、度重なる鉱山開発をくいとめてきたこのインタグは、世界中で威圧的に押し付けられる新自由主義への抵抗のシンボルとも言えよう。彼らが自らの暮らしから提唱するアグロフォレストリー・フェアトレードコーヒー、エコツーリズムといった「資源採掘という発展モデルに対する草の根からの代替案」は、この世界の持続さえも危ぶまれる現在、私には決して踏みにじってはならないものに思われる。

○オンライン署名や寄付サイト
＜緊急支援のお願い＞南米エクアドル・インタグの森を巡って今、起きていること↓
http://www.sloth.gr.jp/movements/ecuador_javier/
＜緊急＞フニン村村長ハビエル・ラミレス氏釈放への支援要請
http://www.giveone.net/cp/PG/CtrlPage.aspx?ctr=pm&pmk=10358
○カンパの振込先
郵便局：00170-6-141662 ナマケモノ倶楽部　一口：1,000円（何口でも）
　通信欄に「インタグ・フニン村ハビエルさん応援」とお書きください。

ヤスニITTイニシアティブ —困難なユートピア建設

アルベルト・アコスタ

7年以上も前、エクアドルはアマゾンのただなか、ヤスニの地中に、相当量の石油をそのままにしておこうと提案して世界を驚かせた。ヤスニITTイニシアティブとして知られるこの提案は、市民社会から生まれたが、ラファエル・コレア大統領の一貫しない矛盾に満ちた姿勢のために、これを強化することができなかった。もちろん大国の政府がその責任を引き受けようとしないせいもあった。コレア大統領は2013年8月15日に、ヤスニ提案の終結を表明し、「このイニシアティブは時代よりも早すぎて、理解されなかった」と言った。が、これを理解せず、エクアドル社会が世界に向かって挑戦した高みにも到達していなかったのは、大統領自身であったのだ。

抵抗から生まれた提案

伝統や神話を破壊するというのは、大変難しい仕事である。現実主義が変革を押しとどめる。国際的な財政支援によって、イシュピンゴ、タンボコチャ、ティプティニ油田（ITT）の石油を採掘しないかわりに国際的な財政支援を受けるというアイデアは、多くの権力セクターを驚かせ、また抵抗を引き起こした。石油開発中毒となったエクアドルの支配階級にとって、原油を採掘しないという提案は、狂気の沙汰としか思えなかった。外国においても、石油の利権を持つ企業はこの提案を懐疑的に眺め、後にはそれを葬り去ろうとする。だが、このとっぴょうしもないアイデアはエクアドル内外の市民社会から受け入れられ、力を持ったのである。

2006年12月に提出されたこの提案は、コレア大統領によって受け入れられる以前に、市民社会のなかで作られてきた。石油採掘を凍結するという当初のアイデアが、アマゾンの石油開発の暴風のなかで苦しめられてきた人々から生まれたことは確かである。

アマゾン共同体の抵抗は、裁判という形で国際的に拡がった。これは「世紀の裁判」として知られるもので、シェブロン‐テキサコ社の石油採掘によって被害を受けた先住民共同体と開拓地住民が提訴したものである。この裁判は20年以上も前に始められ、その結果以上に、この地球上でもっとも力のある石油企業を、加害者として被告席に座らせたことに意味があった。

石油開発への厳しく長い抵抗のプロセスを経て、エクアドル・アマゾンの中南部において石油採掘凍結の主張が作られてきた。そして2001年、対外債務を問題にしていたグループは、国際債権者にたいし、アマゾンを保存する代わりに、負債の支払いを中断するという歴史的協定の可能性を提起する。これは環境債務の観点からの要求であり、債務国となるのは富裕国だ。

アマゾンの別の場所パスタサ県では、キチュア・サラヤク共同体は、ブロック23での燃料総合会社（CGC）の石油開発を止めることに成功した。この石油企業が国や軍の協力を受けていたことを考えると、これは小さな共同体の大きな勝利であった。この闘いには国際的な連帯が寄せられ、2004年7月、米州人権委員会は、サラヤク先住民族の主張を認めた歴史的な宣告をおこなった。2007年前半、エクアドル政府は、最終的にこの決定を受け入れた。だが、この後にはまたもやサラヤクが危険にさらされることになる。2010年11月におこなわれた政府とAGIP社とのブロック10をめぐる契約更新交渉において、またしても共同体に諮ることなく、この石油会社にアマゾン先住民族の多くに被害を与えるブロック23の開発許可が与えられたのだ。

2005年6月、これらの要求を集約して、ヤスニの原油を採掘しない提案が、広く石油採掘凍結の主張

の一環として、『気候と権利の保全のための、エコロジーの呼びかけ』のなかで主張される。これはイタリア、モンテカティニにおいて開催された保護地区のエキスパート特別チームによる初会合での、オイルウォッチの立場表明である。これは後に、『天国への襲撃：保護地区での石油会社』(2006年、オイルウォッチ発行)に収められる。

これらすべての提案やイニシアティブは、やがて統一され、エクアドル、アマゾン中南部における石油開発凍結の要求として、2006年に作られた祖国運動（現在の祖国同盟）による政府計画(2007－11)の一部となった。つまり、原油を地下にとどめておくというこのイニシアティブでもっとも重要な部分は、コレア大統領がこれを主張し始めるずっと以前に決まっていたのである。

ヤスニITTイニシアティブの有力な目的

ヤスニ提案は、異なる意見はあったが、中心の目的は一つであった。ヤスニ国立公園のもっとも東に位置する3つの油田の原油を採掘しないということである。

アマゾン地方は一つの広大な領域であったが、異なったセクターが管理する断片の集合と化している。以前先住民族のテリトリーであったところでは、宗教的伝道師や、石油会社、そして国家とそのコントロールをめぐっての対決があったが、比較的小規模であった。が、現在の形のテリトリーが形成される過程では、プロテスタント、カトリックの両教会、軍隊、石油企業が決定的な役割を果たした。

アマゾンで数十年にわたって石油が採掘されてきた結果、みずからの意思で孤立している先住民族は、開発地域から遠ざかり、現在は最後に残された森林地帯にいる。これ以外の地域にはその他の先住民族が集中して居住する結果となっており、彼らが開発にますます反対することは明らかだ。

ヤスニITTイニシアティブの柱は以下の4つである。

1）土地を守り、みずからの意思で孤立している先住民族の生命をまもる
2）地球上で他にはない豊かな生物多様性を保全する
3）大量の石油を地下に留めておくことによって、4億1000万トンのCO_2の排出を防ぎ、地球の気候を守る
4）エクアドルにおける脱石油移行の第一歩をしるし、他の地域にたいする先例とする

しかしさらに第5の柱とでもなるべきものがある。気候変動による地球規模で深刻な問題への具体的な解決を、人類全体で見つけだす可能性を提起できるのではないかということだ。

エクアドルが代償として国際社会からの財政協力に期待するのは、この地球上のいくつもの社会によって生み出された多くの環境破壊にたいして、特にもっとも富裕な者たちが、その責任を引き受けるということだ。それは決して開発主義を押し進める（コレア大統領が理解しているような）俗悪な補償金のように扱ってはならないのである。

このイニシアティブは、「よく生きる、あるいはスマク・カウサイ」の建設のなかに位置づけられる。単なるオルタナティブな発展の提案ではなく、発展にたいするオルタナティブなのだ。

矛盾に満ちた紆余曲折

当初原油を地下に留めておくという提案は、当時の石油鉱山相によって政府レベルで推進された。が、これは石油を採掘しようとする国営石油企業ペトロエクアドルと対立することになった。この対立はコレア大統領が介入せざるをえないほどに先鋭化したが、このとき以来大統領は、ヤスニITT油田の採掘に態度を変えることになる。大統領によるこの態度が、混乱や恐れ、不信を作り出していった。

加えて別の問題もあった。2008年のモンテクリスティの憲法によって、自然の権利が承認されたが、これでもヤスニ提案をめぐる状況は変わらなか

った。憲法による規定は明快で、第71条には：「自然あるいはパチャママ、そこで生命が再生産され実現し、それは全体としてその存在が尊重される権利を持ち、その生命サイクル、構造、機能、発展のプロセスが維持、再生産されなければならない」とあり、そして第73条には、これを補足して：「国家は予防の措置をとり、それが種の絶滅を招く恐れのある場合や生態系を破壊する場合や自然サイクルを恒常的に変更する場合、これらの活動を規制する」とうたわれている。それにもかかわらず、そのうえ憲法第57条では、みずからの意思で孤立する自由な民族がいる土地における採掘を禁止していることを完全に忘れて、金儲けの道をひた走ることになる。

孤立する共同体への危険を根絶するような技術も存在しなければ、石油の流出などの事故が起こらないという保証もなく、この豊かではあるが脆弱な生態系の地域が守られるという保証もないのである。それにもかかわらず、コレア政府は経済的利益の追求に固執し、明確な方向性を持たず、戦略もなく、募金活動のような活動に終始したため、ヤスニ提案は終わりを迎えた。

経済的補償の可能性と限界

ヤスニ提案の議論で重要な部分は、石油採掘の凍結に経済的「補償」をもうけるということで、これが提案が前進するための条件となった。国庫への収入を保証するという意味では肯定的で、社会政策を継続できるし、石油採掘による利益を失うことからこの提案に反対する人たちを打ち破るための武器となる。だが同時にこの「補償」で、提案はただ財政的にのみ捉えられ、それ以外の目的や政治的な問題、とりわけ権利やみずからの意思で孤立し隠れている人々の生命や生物多様性の保護、2008年のエクアドル憲法に規定された権利の問題が考えられなくなってしまったのである。

2013年8月15日、コレア大統領が、ヤスニITTイニシアティブを公式に葬ったことによって、その方向は180°転換する。この提案を推進するために国内、国外で展開された論拠の多くは忘れられるか、単に否定された。隠れて生活している人々はもはや存在しないことになり、脆弱な生物多様性の保護は、一夜明けると、容易に保障できるものとなった。CO2排出は心配するべき問題ではなくなった。石油がもたらす収入は2倍以上、現在の価格で70億ドルから182億ドルという予想になった。そして社会に希望を与えるニュースがもたらされた。ITTの原油によって、エクアドルは石油の地平線を広く切り開き、そしてついに貧困を撲滅することが可能になった、と。

政府試算のあやうさ

政府はこの開発で400億ドルの収入が見込めるとしているが、ITTの原油の採掘は、22年から25年をかけて行われるので、1年あたりの収入で計算すると、平均２０億ドル以下ということになる。地方政府はその10％を受け取ることになっており、その額は年間2億ドル以下となるが、これは政府が今年宣伝広告費に費やしている額よりも少ないのだ。

この収入によって今度こそ貧困が撲滅できると考えるのはごまかしである。エクアドルはこれまで41年間石油を採掘してきたが、いまだに発展もしていなければ、貧困もなくなっていない。さらに、現政府は7年以上も続いていて、これまでのどの政府より多くの歳入（1520億ドル以上）がある。それでも貧困を終わらせることができないでいる。全国レベルで貧困率が37％から27％まで減少はしているが、アマゾンを含む先住民が多く住む地方の貧困率は変わっていない。貧困は社会投資、公共事業のみでは根絶できるものではなく、富の根本的な再分配が必要である。

もしも富の再配分に取り組むならば、貧困撲滅に必要な予算が確保できるだろう。たとえば富裕層が、かれらの莫大な収入から1.5％余分に税金を支払うなら、社会環境的な影響を与えずに、即座に年間20億ドル以上の収入となり、ITTのすべての石油から得られる金額より多くなる。また、富裕者ばかりが利益を受けている政府の燃料補助金をやめれば、年間45億ドルが浮く事になり、もう一つの資金

源となるであろう。電気通信会社との契約の再交渉をすれば、さらに収入を増やす事ができるだろう。これらの企業は正味の資産に対して、年間38.5%！もの利益をあげているのだ。

ITTは2016年から原油の採掘がおこなわれる。政府によればその翌年の採掘量は60万バレルに達する。だが、この原油はAPI15°以上の重質油だ。硫黄を多く含み、採掘するためには大量の地層水を汲み出すことが必要となる。これは大きなコストがかかり、深刻な汚染ももたらす。

ヤスニ提案の価値は、エクアドル社会に脱開発主義の道という意識を植え付けたこと、天然資源が経済的収入を得るための唯一の道ではないことを明らかにしたことにある。しかし炭化水素に依存する社会に戻ろうとする連中が、自称進歩主義者を名乗る政府によって、オイルダラーを使って権力を握っている。そして石油と鉱物の高価格の上にあぐらをかいているのだ。物事は単に計算されるものではなく、いま問題なのは、人権であり、自然の権利であって、単に経済的収入の問題ではない。

政府の失敗を前にして人民が言葉を持っている

ヤスニITTイニシアティブが、エクアドル政府の首尾一貫性のなさと、石油からの利益の代表者たちの貪欲さによって失敗したとはいえ、このイニシアティブは満足すべき結果ももたらした。この問題が国内外で大きな議論を引き起こしたこと、CO2の排出を下げなければならないことはますます受け入れられ、石油、鉱物も含めて、その採掘をおこなわないことが重要な貢献となるという認識が定着したことなどだ。

このイニシアティブの重要性は、ITTの石油を採掘しないというアイデアから直接的、間接的に波及した多くの提案をみてもわかるし、“ヤスニサール”［ヤスニ化する］という言葉が普及していることにも見ることができる。ナイジェリアのデルタに、ノルウェーのロフォテンの島々に、コロンビアのサンアンドレスとプロビデンシアに、カナリア諸島のランサロテに、ボリビアのマディディに。同様に、フランスやその他の欧州では、シェールガスのフラッキングを禁止に追い込んでいる。

エクアドル国内では、たとえ国際的な財政支援を得ることが出来なくとも、原油は地下に留めておくべきであるという力強い主張が、今日多くの人々によって支持されている。これはオプションCである。これによりエクアドル人民は、国民投票を通じてコレア大統領の政府が失敗したあとの役割を引き受けようとしている。「ヤスニドス」という若者たちのグループは、当局による弾圧にもかかわらず、国民投票を実現するための署名を集めるという大変な仕事に取り組んでいる。

エクアドルにとっては埋蔵量の20%から30%にあたる石油は、人類全体にとってはわずか9日間で消費される量でしかない。石油を採掘してはならない。そうすれば人類が自然と再会するための不可欠のプロセスが可能になり、限界が明らかな化石燃料の時代を乗り越えてエネルギー変革への道を開くことができるだろう。

このような観点から、偏狭で自己中心的な見方を乗り越えて、ヤスニのようなイニシアティブが世界中で花開くことを期待する。そしてそのスローガンは、「第2の、第3の、そしてたくさんのヤスニを！」である。（翻訳：一井不二夫）

アルベルト・アコスタ　エクアドルの経済学者。ACSOの教授であり研究者。2007年1月から7月まで、石油鉱山相。2007年10月から2008年7月まで、憲法制定議会の議長であり議員。2013年選挙での大統領候補。

ラテンアメリカのアフリカ系　シリーズ１

アフリカ系ペルー人　歴史と社会的状況（上）

アメリカ大陸に最初の奴隷船が到着したのは1518年、最後は1880年だった。この期間、約4千万人（訳注：通説では1100万人から1200万人）のアフリカ人が奴隷にされた。捕まえられた人びとは、まずアフリカ大陸内部からセネガンビア地域にあった積み出し港までを歩かされ（16世紀半ばまではセネガンビアで、それ以降は黄金海岸からシエラ・レオーネ、ベニン、ビアフラにも拡大）船で送られた。そのうちおよそ200万人がアメリカ大陸に着く前に死亡したと計算される。死亡の原因は、船内の劣悪な環境と汚れた水や食事で引き起こされる赤痢がもっとも多く、天然痘やはしかも多かった。また、船内で反乱を起こして処刑された者もいた。

ペルー最初の奴隷

ペルー副王領での最初の奴隷は、1527年12月スペイン人コンキスタドール（征服者）アロンソ・デ・モリーナに連れられて現在のトゥンベス県の海岸に到着した。当時の年代記作者（クロニスタ）によれば、奴隷たちは「名前を持たず、皆同じ」だった。

スペイン王室は1529年6月、フランシスコ・ピサロに奴隷売買を許可した。この最初の積み込みは結局実現しなかったものの、その後奴隷貿易は恒常的に行われるようになる。記録によれば、コンキスタドーレスに同行したのはサンホルヘ・デ・ラ・ミナやカーボベルデといったポルトガルの交易拠点で売られたマンディンガやビアフラの人びとであった。

1550年代半ばにはペルーに連行された黒人は3,000人で、主に武器の製造や修理、戦闘や兵站補助などに使われた。クロニスタによって記述された最初の黒人隊長はグアダルーペという名前で、1554年にフランシスコ・エルナンデス・ヒロンの反乱を鎮圧する戦いで、黒人部隊の指揮をした。スペイン人の到着からコンキスタドーレス同士の内紛(訳注1)にいたる間、先住民人口は大きく減少した。当時のクロニスタ、シエサ・デ・レオンは、病気と戦争により先住民がバタバタと死んでゆく様子を描いている。土地はたくさんあったが、労働に駆り出すための人が足りなかった。それを補うために大規模な黒人奴隷貿易が始まったのである。

ポルトガルの交易地から送られた奴隷はパナマで洗礼を受け、カリャオ港を経てペルーに連れてこられた。奴隷は縛られ、「首輪」をつけられてリマまでの長い道のりを歩かされた。リマではマランボ地区に集められた。このマランボという地名は現在のリマにも残っている。

売られた奴隷は、教会などの組織にしろ、個人にしろ、所有者のイニシャルを彫った焼き印をあてられた。この焼き印は「カリンバ」と呼ばれた。男性は額やあご、頬に、女性は肩や背中にあてられた。この習慣は1784年まで続いた。

奴隷の値段　18世紀末まで、リマでの奴隷の値段は健康な16歳から30歳までの男性で400から650ペソで（リオ・デ・ラ・プラタでは200ペソ）、当時馬なしの馬車が300ペソであったことを考えると非常に高い値段であった。これはリマが植民地の権力中枢都市であり、経済活動が活発で富が集まっていたことによる。1800年頃には、ブタ1頭が12ペソ、男性奴隷が500ペソ、女性奴隷が350ペソ、少女は80ペソであった。

人口比　18世紀中葉には、リマ一帯でのスペイン人と奴隷の人口比は、プランテーションで1:34で、主従関係が比較的緊密であった。それに対してリマ北部のウアイト・プランテーションでは1:600で、主人と奴隷の関係は監督(通常はムラート)を介してのものだった。小規模農場では、6〜7人から120人までと巾があった。1767年にイエズス会が追放された時、その農場には5000人を超える奴隷がいたという。

奴隷は、都市部では家事労働、手工業、売り子などに従事した。主人によって売春をさせられたケースもあった。農村部では、プランテーション労働、牧畜、荷車引き、港での荷の積み降ろしなどの仕事をさせられた。

カスタ

社会の中で黒人、先住民、スペイン人の間で混血が進むにつれ、それぞれにカテゴリーをつけ社会ステータスをはっきりさせる政策がとられた。このカテゴリーは「カスタ」と呼ばれ、ヨーロッパの白人を頂点としたた人種ピラミッドを構成した。いくつかの例を挙げると、黒人（ネグロ）とスペイン人の混血＝ムラート(後にパルドとも呼ばれた)、ムラートとスペイン人の混血＝クアルテロン、黒人とムラートの混血＝サンボ、黒人と先住民の混血＝サンボ・デ・インディア、ムラートと先住民の混血＝チーノなどがある。

植民地支配にとって、このカスタは社会のヒエラルキーを維持するために非常に重要だった。例えば1683年には黒人とムラートによる民兵組織ができたが、ここにはサンボは先住民と血縁であるため含まれなかった。トゥパク・アマルの反乱を鎮圧したのはムラートによる部隊であった。この黒人部隊の指揮者、アタナシオ・コントレラス・デル・シドはは、その功績によりスペイン王カルロス三世より勲章を受けている。

同時にこの複雑なカテゴリーのために、アフリカ系ペルー人の人口推移についての研究が困難となっている。現在でも肌の色が黒い人を指してネグロ、サンボ、ムラート、モレーノ、サカラグオ、トリゲーニョなど多様な呼び方がある。

18世紀には、奴隷が法的に社会の中を移動する事ができるようになった。例えば所有者による過酷な扱いを訴えて別の主人を見つける、自由意志で結婚する、自分の自由を買う、奴隷として財産を所有するなど。奴隷が自由の身になるには、所有者による解放、自分で自由を買う、軍に入るなどの方法があった。

コフラディア

地域の修道会や守護聖人のもとでの奴隷による互助組織（コフラディア）も作られた。メンバーは特定のカスタに属する人びとで、お金を出し合って組

植民地時代のカスタ絵より「黒人と白人の子どもはムラート」（上）、「黒人とムラータの子どもはサンボ」（下）＝リマ美術館所蔵

織の維持、病気や冠婚葬祭、逃亡者の保護などで助け合った。祭りにはグループとして積極的に参加し、彼らの文化的な伝統を維持する場ともなった。当時の資料によれば、アフリカの風景や王や女王を選ぶ儀式、家族を壁に描いていたことなどがわかっている。（訳注２）

最初のコフラディアはギニア人、コンゴ人、アンゴラ人によるもので、1540年に作られた。その後17世紀初めまで黒人のコフラディアはとても盛んであった。だが18世紀になると衰え、17のコフラディアが残るだけで、経済的には破綻していた。

奴隷のネットワーク

奴隷状態から抜け出すためには血縁や婚姻、宗教的な結束によるネットワークが不可欠だった。ネットワークの仲間が協力して奴隷の自由を買ったことが知られている。女性は男性より安かったので、ま

ず女性奴隷を買い、自由の身になったその女性が働いてお金を貯め、次の奴隷を買うための資金とした。自由の身となった女性奴隷は主に乳母や農場で家畜の世話をする、路上でパン生地や食べ物を売る、マーケットで店を出す、奴隷を買い取り働かせる、女中になるなどの仕事をした。親戚を助けるために再び自分を売るということもあった。

抵抗—逃亡や反乱

奴隷の抵抗の形態は、仕事を怠ける、事故を起こす、仕事に使う機具を壊す、サボタージュ、コフラディアに参加する、病気になる、自殺するなどの消極的なものから、暴動、蜂起、反乱を起こす、逃亡する、パレンケを作る、山賊行為をするなどの積極的なものまでさまざまだった。

植民地時代初期から奴隷の反乱は恒常的にあった。1544年には逃亡奴隷（シマロン）の存在はリマやトゥルヒージョで顕著であったし、1545年にはリマの北部で植民地政府の転覆を謀った逃亡奴隷のパレンケが襲われ破壊されたという記録もある。

奴隷の反乱があまりにも頻繁だったので、1557年には新しい役職が作られリマ周辺をパトロールしシマロンや山賊の警戒に当たった。これには「モゴジョン」と呼ばれた解放奴隷も入っていた。

シマロンによる抵抗は先住民と協力して行われる事も多かった。例えば、ビルカバンバでのインカの抵抗（1538~1544）では、マンコ・インカはスペイン人の軍事戦略に詳しいシマロンを味方にしていた。同様に、クスコのキジャバンバ峡谷でもシマロンが先住民と共に戦った。17世紀初頭には、ビルカバンバで別の反乱が起こったが、当時この一帯にいた2000人の黒人はこれに参加、二つのグループに別れて戦った。クスコの黒人の助けもあったという。だが、この反乱は残酷に鎮圧された。同様に、フアン・サントス・アタワルパの蜂起もシマロンの協力が不可欠であった。

これに対して植民地政府が取った政策は、黒人と先住民を分離する事だった。例えば、労働に駆り出される先住民を指揮し罰するのは黒人やムラートにまかされ、奴隷、自由民にかかわらず、死刑執行人は黒人の仕事とされた。

パレンケ

パレンケ（逃亡奴隷の集落や隠れ家、洞窟などの総称）は、追っ手がこないように険しい山中などに作られ、規模は小さかったがたくさんあった。パレンケの生活は、周辺で畑を作り、町で売るためのかごや帽子などの手工芸品の制作、外の奴隷から送られる肉や農作物、農具など、そして強盗などでまかなわれた。パレンケがどのくらい続いたかや何人くらいいたかなども一様ではなく、数カ月しか持たなかったところもあれば数年続いたところもある。

リマ近辺のパレンケでは、1631年にできたシエネギージャ、1632年のマラとカランゴ、1761年のカラバイージョとサンブラノ、1796年のビセンテーロなどがある。これらパレンケは支配者にとって脅威であり、破壊するためにかなりの軍事力が投入された。

パレンケの組織は、まず将軍と呼ばれる軍事、民事の指導者、そしてそれを軍事面で補佐する大佐と少佐、そして集落の運営を行う村長がいた。防衛時にはすべての男性は兵士になり、農業や家事労働、手仕事などは女性が担った。現金収入のためには籠や帽子などを作り、町に住む黒人とのネットワークを通じて町で売った。同時にこのネットワークで町のニュースを知る事もできた。

強盗団と反乱

強盗行為は、パレンケの資金を調達するための一手段として逃亡奴隷と結びついていた。盗んだ物を貧しい人びとに分配したという黒人義賊もあらわれている。強盗団は通常20人から40人で構成され武装して馬に乗っていた。レオン・エスコバルは強盗団の頭領だったが、1835年12月28日にリマを制圧し、大統領の椅子に座ったが、２日後には捉えられ、その翌日に銃殺されている。

奴隷による反乱は、状況を改善するための小規模なものから、奴隷状態そのものを変えるための大規

模なものまで数多く起こった。奴隷船の中での反乱（訳注３）もあった。プランテーションでの暴動では、元イエズス会のプランテーション、サン・ハシント農園でのものが有名だ。イエズス会時代に比べて食事の量が減らされたのと、それまで許されていた不耕地の利用（自分たち用に作物を栽培するため）が禁止されたことによる暴動だった。

大規模反乱で有名なのは、1848年にネペン農園で、そして1850年にはチカマ、サンタ・カタリーナとトゥルヒージョ一帯の奴隷が蜂起したものだ。反乱者は市の中心であるアルマス広場に入った。刑務所を解放し、兵舎を襲って武器を奪った。そして市と農園主に対して奴隷解放令に署名するよう要求した。この反乱はその後の奴隷制廃止に道を開いたと言われている。

奴隷制の廃止

1821年の独立以降は、ペルーには4万1000人の奴隷しか存在していなかった。そしてそれもその後の度々の戦争によって減少した。1854年に制定された奴隷制廃止令は、政府内の長いせめぎ合いの結果ではあったが、奴隷制そのものの是非についての議論は尽くされず、結局は奴隷所有者の利益が損なわれないために多額の賠償金が払われて決着した。

奴隷制廃止までの道のりは紆余曲折があった。1780年11月、トゥパク・アマル（2世）による反乱で最初の奴隷制廃止令が出されたが、鎮圧されて反故となる。その後1817年にスペイン王室が奴隷売買を禁止する。1821年、ホセ・デ・サン・マルティンがリマでペルーの独立を宣言し、スペイン人の所有であった奴隷を解放し、彼らを歩兵として軍に編入した。そして奴隷売買を禁止し、ペルーの全ての奴隷を解放する事を布告する。だが、その後サン．マルティンから独立戦争を引き継いだシモン・ボリーバルは1825年9月、兵士以外の解放奴隷を以前の奴隷状態に戻した。1835年3月には農園主からの圧力で再び奴隷売買が認められる。このような道のりを経て、最終的には1854年に奴隷制が廃止となる。

（訳・まとめ　新川志保子）

訳注１　コンキスタドーレス同士の内戦（Guerras Civiles entre los conquistadores）征服地の分割略奪品の分配や権力をめぐっての内紛。1537年から1554年まで続いた。

訳注２　これらの奴隷は積み出し港があった場所の名前を便宜的に付けられたが、一人一人がどの共同体から来たか、その文化や習慣はどうであった、などは知る事ができない。ブラジルやカリブ地域のようにヨルバ人が多かった場所ではヨルバの言葉や伝統がかなり維持されたのとは対照的に、ペルーに連れてこられた奴隷たちは「アフリカから来た」ことと「奴隷である」ことが唯一の共通点であった。コフラディアの壁に描かれた「故郷」や「王や女王」の絵は、彼らの理想の再創造と言える。

訳注３　奴隷船の反乱　1799年5月27日に起こったサント・ドミンゴ号での奴隷反乱が有名。ハーマン・メルヴィルの小説『ベニート・セレーノ』のモデルとなった。リマに向かう途中の船内でバボというセネガル出身の奴隷が指導して奴隷が蜂起、アフリカに戻ろうとした。結局反乱者はとらえられ、1799年9月24日にリマで裁かれた。

原典：
LOS AFROPERUANOS:HISTORIA Y SITUACION ACTUAL
http://afroperuanos.wikispaces.com/Historia
Esclavitud, movilidad social y resistencia en Lima a fines del periodo colonial
http://www.pacarinadelsur.com/home/mascaras-e-identidades/440-esclavitud-movilidad-social-y-resistencia-en-lima-a-fines-del-periodo-colonial
http://www.banrepcultural.org/blaavirtual/todaslasartes/pancho/pancho2.htm

ハイチ友の会・2014年現地視察の報告

泣き笑いの結核検診奮闘記

「ハイチ友の会」代表　小澤幸子

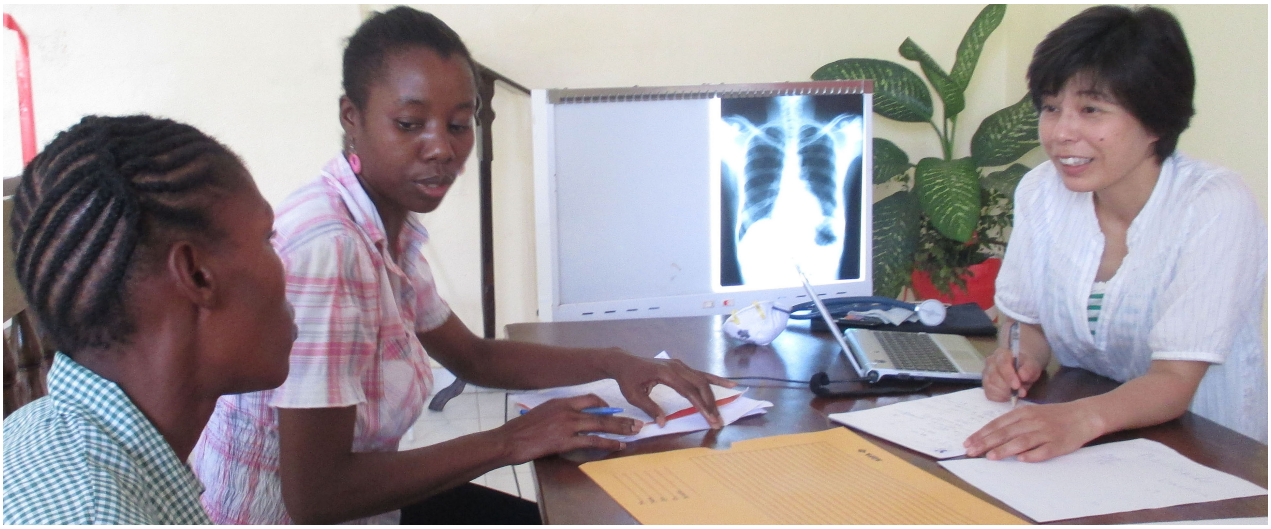
「ハイチ友の会」は民間レベルでハイチの復興を支援することを目的に設立され、今年で20年目を迎える小さなNGOです。2010年のハイチ大地震が大きく報道されたことから、カリブ海に浮かぶ小さな島国と知られましたが、それまでは「タヒチ」と間違われてばかりでした。RECOMとは1995年に会を設立した当初から気にかけていただき、RECOMに縁のある梅村さん（当時旅行代理店エストレージャを経営）の手配で94年10月、軍事政権崩壊直後のハイチに初めて渡航を果たしたのも懐かしい思い出です。

ハイチと日本はこれまでよくも悪くもあまり接点がありませんでした。しかし2011年3月以降、大地震に国の根幹を揺るがされた国同士として、想いを共有しやすくなったと感じています。復興の足取りはわが国では原発事故、ハイチではもともと存在した圧倒的な貧困が妨げとなり、思うように進んではいません。

代表の小澤は大学文学部2年生の時、国際緊急援助の学生ボランティアの活動をしていて、初めてハイチを知りました。ハイチについて調べるうちに、在日本ハイチ大使と出会い、ひょんなことから軍事政権直後のハイチを訪れることになったのですが、たまたま別の同行者の希望で訪れたハイチの国立病院の悲惨な医療状況を見て衝撃を受けました。

病院前に列をなす傷病者を、銃を持った門番がブロックしていました。中に入っても病人は埃っぽい床にむしろを広げて転がされているだけ。さぞかし医療者は忙しかろうと思いきや、皆ゆったりとしていました。なぜなら医療物資がほとんどないからです。病院は死に場所でしかありませんでした。素人目にもこんな状況はあってはならないと憤りを憶えました。誰かここでまっとうな医療をしてくれればいいのに。しかしそう簡単に「誰か」は見つかりません。それなら自分がなればいいんだ、その思いから私は医師を志しました。そして再受験をし、地元山梨の大学で医学教育を受け、現在は山梨市の市立病院で内科の医師として働いています。

ハイチ大地震直後には日本赤十字の緊急医療支援チームのメンバーとして現地を訪れたのですが、その時は、街はほぼ全域が空爆にでもあったかのような壊滅的な被害状況でした。しかし3年ぶりに2013年6月に訪問したときには、国際支援



が入り、道路事情が目覚ましく改善していた反面、もともとスラム街があった地域では、トタン屋根と国連が震災直後に配布したビニールシートに覆われた小屋が立ち並び、被災直後の避難民キャンプのテント村とあまり変わりない様子でした。

2014年4月25日から5月6日までそんなハイチの現状把握と無料結核検診を実施するために代表の小澤と会の事務局で総務を担当するその母がハイチを訪れました。65歳の母にとっては初の海外旅行でしたが、健康なうちに娘が足繁く通う国の現状を見届けたいという思いで奮起してくれました。

今年、気が付いたのは、外国人援助関係者の姿がめっきりと減ったことと、ソーラーパネルがいたるところで活用されていることでした。しかしそれ以外はほとんど変わりがなく、ビニールシートで覆われたテントハウスが散見されるのも同じようでした。母には再貧困地区のそばの市場がほとんどゴミのようなものばかりであふれていたことがショックだったようです。

今回の主な渡航目的は昨年6月の渡航時に、神戸の医療系NGOのFuture Codeと協力して初めておこなったレオガン市シグノ周辺の無料結核検診が成功したので、再び3日間の無料結核検診を行うことでした。

日本では日本の結核罹患率(人口10万対の新登録結核患者数)は16.7で先進国では比較的高いのですが、ハイチのそれは304。HIV/ AIDSの合併例も多く、多剤耐性結核菌の蔓延も懸念されており大きな問題となっています。シグノに国立結核療養所があり、長く日本人シスターの須藤昭子医師が結核診療に携わっておられましたが、やっと整いつつあった結核治療の拠点がハイチ大地震のために全壊してしまったのです。しかしその後、日本のPKO部隊が地震直後に被災者の診療のために持ち込んだレントゲン機器が、サナトリウムに寄贈されることになりました。それをきっかけに、ハイチ支援に携わる若い医療者たちが力を合わせ、シスター須藤の長年の夢であった早期発見、早期治療につながる結核検診を実現させたのです。

この検診の概要としては、事前に結核患者の家族や咳・痰・熱などの症状のある人に現地医師が受診を勧めておいてもらいます。そして検診時にはレントゲン写真と症状、病歴から結核が疑わしい人を私たちとハイチ人医師で判断し、喀痰検査を指示します。痰から結核菌が検出されれば結核と診断され、結核菌をまき散らさないように、隔離して入院加療が必要となります。検診会場となるサナトリウムではWHOやUNDPによって喀痰検査と結核治療薬の配布は無償で行われており、入

院施設を持っているため、患者が見つかれば治療につなげることができるのです。

レントゲン検査代は通常、最低でも210ハイチドル（約2400円）かかります。しかしハイチ人の6割は1日1ドル以下で生活しており、それは彼らが飲まず食わずで、20日間以上生活して得られる金額と同等なため、残念ながらレントゲン機器はあってもめったに撮影されることがありません。その検査代が無償ということで、健康に不安があっても、金銭的な理由でこれまで検査することができなかった人たちが、私たちの検診を心待ちにしています。初回の検診の時にはうまくいくか私たちは非常に緊張していましたが、生まれて初めてレントゲンを撮ってもらった人たちが、レントゲン写真上は問題ないと言われると躍り上がって喜ぶ姿がとても印象的でした。

これまで3回行われた結核検診で、のべ455人のレントゲン写真を撮り、現在わかっているだけで少なくとも10名の新規患者を発見し、7名を治療につなげることができました。

しかし問題は山積みです。3名の患者は結核を人に伝染させるリスクが非常に高いにも関わらず、隔離はおろか治療にもいたっていません。それに今回の訪問で、痰の検査を指示しても実際には痰を持って来ない人がかなりの割合でいることが分かったのです。理由があって受診しているのに、レントゲンで怪しい影 があると指摘しているのに、しかも喀痰検査もサナトリウムでは無料でできるにもかかわらずです。現地医師に聞いても、誰に聞いても、受診者たちはレントゲン写真を撮ったことで満足してしまったのだ、追加検査で診断を確定することの意義が理解できないのだ、わからない人には何度言っても、どのように言ってもわからないのだから自己責任だというのです。でもそれでは検診の意味がほとんどありません。私たちが目指す早期発見・早期治療の意義を、患者さんもスタッフも共通認識とするのには時間と根気が必要です。

それでもあきらめることなく私たちは今できることを少しずつでも進めていかねばなりません。ハイチ大地震の記憶が薄れつつあるなか、差し伸べられる支援の手が少なくなっていますが、私たちはこれまで通り、地道な努力を現地の人たちとともに続けていきたいと考えています。

随時ご寄付を受け付けております。

郵便振替口座　00130－4－14940
ハイチ友の会
http://friendsofhaiti.home.mindspring.com/j_new/index.html

『ラ米百景』番外編

山崎　幸子

エミリアーノ・サパタを巡って

私は若い頃からラテンアメリカが大好きで、休暇を利用して旅をしている者です。時々道草や寄り道をしながら、のんびりと歩いています。立教大学ラテンアメリカ研究所で清水透先生の講座を受講してメキシコ革命とエミリアーノ・サパタに興味が湧き、この度メキシコ、モレロス州のサパタゆかりの地を訪問しました。

初めは、彼が 1879 年 8 月 8 日に生を受けた地、アネネクイルコ村です。小さな村で、現在も生家の一部が残り、隣接してサパタ記念館があります。庭にはロベルト・ロドリゲスによるサパタの戦いを描いた壁画もあります。崩れかけたアドベ（日干しレンガ）作りの質素な生家は六畳二間くらいの広さです。博物館では、館員たちが熱っぽく解説をしていて我が村の英雄に対する誇りを感じました。

次はそこから 20 キロ程南のサン・ファン・チナメカ農場です。1919 年 4 月 10 日彼が暗殺された地です。荒れ果て崩壊しそうな建物があり、その薄暗い建物の中に立つと、当時へとタイムスリップしてしまいそうでした。敷地にある高く古びた煙突には、「Tierra　y　Libertad（土地と自由）」と大きく書かれ、ここがサパタゆかりの地であることを示すかのようでした。

この駆け足の訪問で、私が感じた事が二つあります。

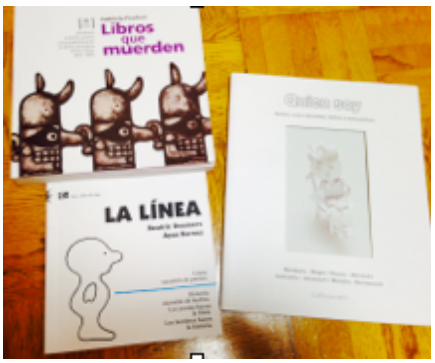
１つ目はサパタの夢と現代のサパティスタ達のつながりです。メキシコ革命の火ぶたが切っておとされた 1910 年当時、アシエンダ制のもと農民の 90％は土地を持たず、農園主の債務に拘束されていました。サパタは農民を解放し、耕作する土地を与える為に立ち上がり、戦いました。彼の理想は、農民が自分達の土地を耕し、共同体の中で助け合いながら協同作業を行い、祭りを楽しみ、悠久の時の流れの中で自然と調和した生活をおくることではないかと想像します。だからこそ、サリナス政権の政策、北米自由貿易協定によって、危機的状況に追い詰められようとしていた先住民の人々が「もうたくさんだ！」と立ち上がった。今回の旅でそのことがとても納得できました。サパタの信念と理想の後継者だから「サパティスタ」なのだということを。

2 つ目は、サパタとエルネスト・ゲバラの共通点です。出身も育ちも異なりますが、共に頑固なまでの信念と理想をもっていたと思います。ゲバラはキューバで権力を行使できる立場にありながらも、それを捨て、ラテンアメリカの人民の解放という壮大な理想の実現に向けて行動しました。そして志半ばで殺されました。サパタはカランサやオブレゴンと革命の方向性を巡って対立し、結局敗北しますが、妥協することなく、革命綱領であるアヤラ計画の実現を求め、戦いを続けますが無残な最後を遂げます。しかし彼の「土地と自由」「土地はそこで働く者のもの」という強い願いは、1917 年憲法第 27 条土地に関する基本事項に盛り込まれました。ゲバラの信念を貫いた潔い生涯と思想は今もなお世界の多くの人々を魅了し、共感を得ています。一方農民解放と農地改革のために戦い抜いたサパタの熱い思いと不屈の魂は、伏流水のように静かに、でも枯れることなくメヒコの大地に流れ続け、1994 年 1 月 1 日「サパティスタ民族解放戦線」という姿で噴出します。そして今度はインターネットという武器を用いて、自分達の目指す社会を世界中に発信し、多くの人々に支持されてきました。映画「Viva！ Zapata」の中のサパタの言葉を借りれば、「人は死んでも、信念は死なない」のだと思います。サパタやゲバラのように理想を追い求め、信念を貫く生き方は、誰もが出来るものではありません。しかし時代を超え、普遍的な人間のあるべき生き方として、多くの人々を魅了し続けるのではないかと思います。

日本ラテンアメリカ子どもと本の会(CLIJAL)の活動から

負の歴史と向き合うアルゼンチン児童文学

宇野 和美



4月末に、はじめてアルゼンチンを訪れました。ブエノスアイレスのブックフェアが目的でしたが、それ以上に印象深かったのがla nube（雲）という名の私立図書館でした。スペインでは、内戦からフランコ死去まで続いた40年近い独裁で、それ以前の児童書の多くが失われてしまったので、アルゼンチンもそうだろうと勝手に思っていたのですが、宿を提供してくれた児童書編集者のジュディが「絶対見るべき」と案内してくれたこの図書館には、元小学校教師の館長パブロ・L・メディーナさんが収集した、7万冊にものぼる、独裁（1976〜83）以前から現在に至る子どもの本が収蔵されていたのでした。

私が訪れたとき、読書室の一角では、児童書研究者を中心とした7、8名のグループが勉強会を開いていました。ピノキオのコレクションや日本の紙芝居もある貴重な蔵書のほかに館内には、1000冊以上の貸出用の本のコーナー、古本から新刊までを扱う書店、映画やオーディオビジュアルの歴史をたどる品物（蓄音器や昔の映写機など）を集めた部屋や、人形劇の舞台、外遊びのできるパティオもあります。現在の場所に来てからは10年ちょっとですが、la nubeの活動は1975年から続けているそうです。

私が以前にアルゼンチンの作家オスバルド・ソリアーノ文／ファビアン・ネグリン絵『ぼくのミラクルねこネグロ』（独裁時代にパリに亡命した一家の男の子のお話：アリス館）を翻訳したことを告げると、パブロさんは、出版されたばかりの、ガブリエラ・ペスクレビ著Libros que muerdenという本を見せてくれました。これは「有害な本」として独裁の7年間に発禁処分となった児童書のカタログです。ジャングルに帰るためにゾウなどサーカスの動物たちがストをするという、エルサ・ボルネマン(1952-2013)のUn elefante ocupa mucho espacio(ゾウはたくさん場所をとる)、線があったら何ができるかをマンガ風のしゃれたタッチで描いたベアトリス・ドウメルクのLa línea(線)（これは発禁第１号の本だそう）、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』など、禁書になっていた本を１冊１冊とりあげ、その背景や著者のプロフィールを解説している貴重な資料。

また、ブックフェア期間中に、アルゼンチンのIBBY（国際児童図書評議会）支部ALIJAが前年度出版された児童書から選ぶ優秀図書が発表になるのですが、今回の大賞および出版社賞に、¿Quién soy? (私はだれ？)が選ばれたのも興味深いことでした。これは、独裁時代に行方不明になった、当局に逮捕された若者たちの子どもの実話に基づく４つの物語をおさめた本で、4組の作家（2年前に国際アンデルセン賞を受賞したマリア・テレサ・アンドルエットなど）と画家（『パパとわたし』（光村教育図書）のマリア・ウェレニケなど）が、それぞれに力のこもった作品を書き、モデルとなった若者たちのコメントが添えられています。行方不明になった子どもたちと同世代の編集者の思いから発したプロジェクトです。

5月には、独裁時に行方不明になった孫たちを探す「五月広場のおばあさんたち」がツイッターでお話を募集するイベントが開催されました。審査員が選んだお話に、『かぞくのヒミツ』（エイアールディー）のイソールや、マリア・ウェレニケ、ナシオン紙に連載のコマまんが『マカヌード』で人気のリニエルスなどが絵をつけるのだそうです。

この深い陰影のある国の文学を、こういった背景も含めてさらに紹介していけたらと思います。

音楽三昧♪ペルーな日々（第55回）

セントロ・コスコ・デ・アルテ・ナティーボの功績と現在

インカの都が置かれた世界遺産都市クスコ。そこで今なお愛される一つの楽団がある。「セントロ・コスコ・デ・アルテ・ナティーボ(クスコ土着芸術センター)」と名付けられたその楽団は、自らの劇場と舞踊団を持つ、由緒正しいペルーを代表するエストゥディアンティーナとして知られている。(ちなみにコスコとは、クスコのケチュア語での発音である)

エストゥディアンティーナとは、そもそもスペインで生まれた学生弦楽合奏団だ。学費を稼ぐために学生たちが集まって演奏したのがその起源とされている。それがラテンアメリカに渡ると学生だけでなく、地元の名士たちのサロン音楽になったり、移民たちの県人会音楽として発達していった。あまり知られてはいないのだが、そんなこんなでエストゥディアンティーナは、20世紀前半期頃までラテンアメリカの都市音楽の重要なスタイルの一つとして各地で愛された楽器編成だった。基本的にはマンドリンとギターを中心に、バイオリンやアコーディオン、ギタロン(ベースギター)などで構成され、地域毎のローカルな楽器がそれに加えられる。ペルー沿岸部ではそれがカスタネットやカホンだったりするし、アンデス地域ではケーナやサンポーニャ、チャランゴやアルパだったりするというわけだ。

このセントロ・コスコ・デ・アルテ・ナティーボはクスコを代表するエストゥディアンティーナであるが、この楽団は実はそれだけではない、ペルー音楽史に燦然と輝く革命的な楽団でもあったのである。今回はその辺りを紹介したいと思う。

20世紀初頭のペルーは、インカ音楽と呼ばれるアンデス風の創作都市音楽が作曲され始めた時代であり、リマや地方都市に住むインテリ層の意識が次第にアンデス文化を視野に入れはじめた時代であった。その最たるものが歌劇「コンドルは飛んでいく」の成功なのであるが、このようなインカ音楽誕生の背景には、先住民をいかにペルー国民として編入していくか、というペルーが抱える大きな社会問題があった。その問題に向きあう中で誕生したインディヘニスモと呼ばれる先住民擁護運動は、社会制度的に先住民を国家の枠組みに編入していくだけでなく、先住民文化を文学や音楽、芸術の諸分野から再評価する、という役割を担っていた。インカ音楽は、その音楽分野での第一段階といって良いものであり、後に登場するワイノ全盛時代を準備した重要なアンデス音楽市場成立に向けた最初の大きな動きであったといえる。

先程も紹介したように、1913年に初演された歌劇「コンドルは飛んでいく」は、アンデス文化やアンデス風音楽を、リマの人々に広く伝えた大きなインパクトのあった事件であった。しかし、「コンドルは飛んでいく」は、あくまで管弦楽によるアンデス風音楽を基盤としている音楽であり、演奏者もアンデス出身者ではなかった。

こうしたリマでのアンデス風「インカ音楽」の流行に、アンデス地域からこれぞ本物の「インカ音楽」！と名乗りをあげたのが、これから紹介するクスコ発の芸能プロジェクトであった。

そのプロジェクトとは、1923年から翌24年にかけて行われた「ペルー・インカ芸術使節団(ミシオン・ペルアナ・デ・アルテ・インカイコ)」の巡業公演であった。クスコを代表するインディヘニスモの旗手ルイス・バルカルセルは、クスコの音楽家たちを集め、従来の都市エストゥディアンティーナにアンデスの楽器を積極的に導入、それまでには存在しなかった新たなスタイルのアンデス風エストゥディアンティーナ編成を作り上げ、その楽団にアンデスの農村部で演奏されていた音楽を演奏させた。それにより、都市部においてギターやマンドリン、バイオリンなどの弦楽器を中心に編成されていたエストゥディアンティーナに、ケーナやハープ、チャランゴなどの農村部の先住民が主に使っていた楽器が新たに導入されることとなった。また、音楽に関しても、先住民的メロディは西洋の美学に基づいて様式化され、アンデス音楽をベースとした新たな音楽へと生まれ変わった。その過程で先住民音楽に特有の甲高い裏声などの部分も聴きやすいようにとアレンジされることとなった。さらに都市のメスティソ層が中心に演奏してきたヤラビー、ワイノ、マリネラなどがレパートリーとして加えられ

Elenco musical del Centro Qosqo de Arte Nativo

た。ちなみに、こうした実践の担い手となった音楽家や踊り手のほとんどはクスコの中流ないしは上流出身者だった。

ペルー・インカ芸術使節団は、ペルー政府からの援助を一切受けずに、ラテンアメリカ諸国(ブエノスアイレス、ラパス、モンテビデオなど)及びペルー国内を巡業して周り、ペルーの文化大使と大絶賛された。この公演の成功は、クスコ、そしてアンデス地域の文化が、ペルーやラテンアメリカ諸国にとって価値があり、賞賛されるに足るものである証明として認識され、彼ら自身の担ってきた音楽文化への誇りの獲得につながっていった。

この当時まったく新しかった編成による音楽的成功は、このアンデス都市音楽と農村音楽の融合という実験的手法に自信を持たせ、更なる音楽的発展を多くの音楽家たちに予感させたのであろう。その成功の余韻も冷めやらぬ1924年のうちに、ペルー・インカ芸術使節団は、クスコでセントロ・コスコ・デ・アルテ・ナティーボ(コスコ土着芸術センター)として改組されることとなった。このセントロ・コスコは、クスコ県下の音楽と踊りを調査し、舞台化し、普及させることを目的とした団体として活動することとなり、エストゥディアンティーナ編成の音楽部門と、舞踊部門によって構成されるスタイルが確立していった。

1920年代にクスコで始まったインカ使節団からセントロ・コスコに続く音楽組織の発展は、大きな音楽的革新を伴ったものであった。こうしたアンデス音楽の新たな革新は、都市部で大きな衝撃を与えた後、周辺の農村地域にも広がっていった。アンデス音楽研究者のソイラ・メンドーサは、その結果、都市近郊の先住民の音楽に新しく西洋的感覚が取り込まれる「フォルクローレ化」が進行したと指摘している。

このような、クスコにおける1920年代のインカ使節団からセントロ・コスコへの流れは、インカの首都であったクスコが音楽的にも中心地としてアンデス音楽の普及に大きな影響力を持つのだ、というイメージをペルー内外に印象付けることに成功した。それ以降、インカ音楽の正統はクスコにあり、というイメージが生み出され、地方の音楽家たちはクスコの衣裳を着て異なる地域の音楽を演奏させられるといったステレオタイプ化された新たな「インカ音楽」のイメージに振り回されることにもなった。しかし、そんなクスコの黄金時代は長くは続かなかった。50年代以降、リマへのアンデス移民が急速に増加していく中、インカ音楽は次第にアンデス移民たちの「故郷の音楽」へと転換していき、その中で首都リマに近くより多くの移民を輩出したワンカーヨやワラス、後にアヤクーチョなどの音楽が台頭していくこととなった。そんな中、クスコは音楽的優位を確立できず、次第にその地位を失っていくこととなってしまったのである。

とは言え、セントロ・コスコはその間も毎日クスコ近郊の音楽や舞踊を自前の劇場で公演しつづけ、時に国内ツアーやヨーロッパツアーなどもこなしながら粛々と活動を続けた。また、今なおクスコ最高のチャランゴ奏者として語り継がれる故フリオ・ベナベンテ・ディアスなど、クスコの多くの音楽家たちがセントロ・コスコで演奏し、また、音楽キャリアのステップとしてセントロ・コスコから活躍の場を広げていった。

かつて革新的アンデス音楽を切り開いた伝説的楽団であったセントロ・コスコは、今では昔ながらの古風なクスコの民謡を我々に見せてくれる楽団としてクスコ市内で愛される存在となっている。時代の移り変わりの中で、それでもクスコの誇る重要な楽団として、彼らは今日も毎日のショーを演奏し、踊り続けている。ぜひ、クスコを訪れた時には彼らの劇場にも訪れてみてはいかがでしょうか？　（水口良樹）

ミゲル先生のメキシコ食巡り

牛肉とコーンチップスの丼

Cuenco de Arroz y Carne de Res

2014年もはや半分がすぎてしまいました。

今回はコメと牛肉を使った料理です。

これまでも米を使った料理を紹介してきました。メキシコ、とりわけユカタンではコメをよく食べ、コメ独特の味と風味を生かした料理は無数にあります。料理の紹介の前にアメリカ大陸の歴史をふり返っておきましょう。

現在「アメリカ」と呼ばれる大陸に、最初のスペイン人がたどりつく以前、アメリカにはコメは存在しませんでした。この時代の有名な地理学者アメリゴ・ベスプチは、1503年から05年にかけてヨーロッパで２冊の本を出版しました。El Mundus Novus（新世界）と La Carta a Soderini（ソデリーニへの手紙）です。これによって大陸は、アメリゴ・ベスプチの名をとって「アメリカ」と名づけられました。

イタリア人の船乗りクリストバル・コロンは、ヨーロッパ人では最初にこの大陸にたどりつきましたが、死ぬまでインドに到達したと信じており、ヨーロッパ人やアジア人にとって未知の大陸とは考えもしませんでした。だから、大陸で出会った人々を「インディオ」（インド人）と呼んだのです。

アメリカ大陸にコメをもたらしたのはヨーロッパ人でした。コメのおかげで、アステカやマヤ文明で培われていた料理がいっそう豊かになり、多くのすばらしいごちそうを生みだしました。

現在ではメキシコ人はだれでもコメを食べます。私の実家でも、さまざまなコメ料理をつくっていました。トルティーヤのかわりに主食として食べることも、トルティーヤのおかずとして食べることもありました。コメとトルティーヤは、とても合う食材だからです。

■材料　４人分

・牛肉の細切り　400グラム
・コメ　４人分
・ウスターソース　大さじ４杯
・タマネギ中　１/２個
・トマト中　２個
・コーンチップス　16枚
・サニーレタス　お好みで
・ピザ用のチーズ　お好みで

■作り方

1）コメを洗って炊く
2）タマネギを細切りにする。
3）トマトを１センチ角に切る
4）サニーレタスを食べやすく食べやすいように細く切る
5）細切りの肉は、食べやすいように長くりすぎないように気をつける。

フライパンで肉に火を通し、色が変わってきたらトマトとタマネギを入れ、３分間ほどかきまぜてからウスターソースを、最後にチーズを加える。弱火にして汁がよく出るまで煮る。

6）コーンチップスを砕いておく。
7）丼にごはんをよそい、肉とサニーレタスをのせ、最後に砕いたコーンチップスを加える。
8）味に変化をつけたいときや、辛いのが好きな場合はハラペーニョをのせてもよい。

ニュースクリップ　2014年6月　さざえ

ラテンアメリカ―急成長するアンデス開発銀行

チャベスが作った南の銀行（Banco del Sur）ほどではないが、1970年に設立されてから静かに成長している銀行がある。アンデス協定（エクアドル、ペルー、ボリビア、ベネズエラ）の一部として作られたアンデス・フォメント・コーポレーション（アンデス開発銀行CAF）で、現在18カ国（南米16カ国とスペイン、ポルトガル）が加盟しており、米州開発銀行（BID）に匹敵するほどの貸付額をもつ。2009年から13年にかけて、メンバー国に年平均で100億ドル貸し付けている（BIDは120億ドル）。CAFが世界銀行やBIDと異なるのは、貸し付けにあたって条件をつけないことだ。貸付金の80％は公共投資にあてられている。ブラジル、ペルー、ボリビアを横断する太平洋と大西洋を結ぶためのルート建設などインフラ整備にも多額の融資をしている。

2009年にアルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイ、パナマが加盟して規模が大きくなった。が、ラテンアメリカ中が融資を必要としており、CAFが南米の通貨・経済を安定させる存在になるにはさらに資金が必要となる。(BBC Mundo, 2014/6/25より)

アルゼンチン―麻薬と暴力の町になったロサリオ市

ブエノスアイレスから約300㎞のサンタ・フェ県のロサリオ市はアルゼンチン第3の静かな都市だ。中心には高層ビルが建ち並び、繁栄している。だが、その外側にはスラムが広がる。ロサリオ市の港は南アメリカでも有数の良港で、物流の要所となっている。麻薬の密輸ルートとしても戦略的な位置にあるため、近年麻薬が流入している。ボリビアからはコカインが、パラグアイからはマリファナが入ってくる。そのため、アルゼンチンで最も暴力がはびこる都市になり、最近2000人の警官や治安部隊が配備されるほどになった。ロサリオ市ではこの数カ月間で殺人が急上昇している。昨年は260人以上が殺害され今年に入って3カ月ですでに100人を超えている。殺人率は国平均の4倍以上だ。大多数は20歳以下の若者同士の抗争による犠牲者でギャング団が抗争して銃を撃ち合っている。廃線となった鉄道の片側は下水やセメント床がないトタン屋根の建物がひしめいたスラム街となっている。以前は殺人の80％以上は麻薬密輸組織と無関係だったが、ここ3年間で麻薬がらみの暴力が激増している。スラムには、麻薬を運ぶ地下の家や密売所がある。扉も窓もなく、お金が入るだけの隙間から、麻薬が売買される。若者たちが見張り、縄張りを守るために1日20ドル支給される。ロサリオ市全体に縄張りが広がっている。大人たちはこうした暴力に無関心である。政府は有効な手段をとらず、警察も賄賂を受け取り汚職がある。（BBCMUNDO/2014/04/16より）

メキシコシティ―　地下の高層ビル

上空からは地上に埋め込まれた三つの巨大な逆円錐形に見える。これはメキシコシティの西にある地下6階建ての商業センタービル「サンタフェ・ガーデン」の明り取りスペースだ。地下に建設するのは、世界で最も大きい都市の一つであるメキシコシティの土地不足の解決策とするためだ。中央のスペースを作る事で光と空気を取り入れられる。地上部は公園で、地下二階までは商業エリア、地下3階から6階は駐車場である。この他にもラテンアメリカ最大の水族館が地下に建設されている。メキシコシティは湖を埋め立ててできた都市なので、このような地下建築は地震に弱いという危惧もあるが、建設推進派は現在の技術ならどのような場所でも安全に建設できると主張している。

そして、中央広場ソカロの下に、地下65階の逆ピラミッド型建築物を作るプロジェクトもある。まだ具体化していないが、大きな論争を引き起こし、安全性だけではなく、回りの古く象徴的な建築や、下に眠るアステカの遺跡が破壊される事も危惧されている。（BBCMundo.com 2014/6/25より）

そんりさ　148号　2014年7月12日発行　日本ラテンアメリカ協力ネットワーク　RECOM　定価400円

関西では雨の少ない梅雨となっていますが、みなさん、お変わりないでしょうか。今年も無事総会を終える事が出来ました。参加してくださったみなさん、お疲れさまでした。

総会の季節と言えば６月、兵庫県の片田舎に住む私は、毎年楽しみにしていることがあります。梅雨の直前、なるべく月のない暗い夜にホタルを観に行くのです。今年も出かけましたが、なんと、ホタルが例年の３分の１ほどしかいません。なんで？　と暗闇の中で目を凝らすと、ホタルの住処である川の向こう岸で護岸工事をしているようです。例年なら、向こう岸の木立がクリスマスツリーのように点滅して、幻想的に浮かび上がり、観る者をなんとも言えない幸福感で満たしてくれたのですが……。悲しいというよりは、またひとつ自然が壊されてしまうという切羽詰まった不安を感じました。毎年ホタルを見に行き、無意識のうちに、ここの自然はまだ大丈夫、と確認作業をしていたのでしょう。ホタルを楽しみながらも、抱えていた不安。この先どうなるのか、先の見えない大きな流れの中を、もがきながら泳いでいるような、最近はこんな不安を感じることが多いような気がしています。　（大西裕子）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で　　月　　日、
発送は京都で　　月　　日（土）の予定です。
参加いただける方は連絡ください
メーリングリスト　会員・購読者は無料で参加できます。
E-mail　recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください
ホームページ　http://www.jca.apc.org/recom

Vol.148 ナルコ・メヒコ
Vol.147 サパティスタ武装蜂起20年
Vol.146 グアテマラ視察報告
Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今
Vol.144 ブラジル・家族農業の危機
Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判
Vol.142 サパティスタの新しいサイクル
Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。 入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。 レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・ 貸出
☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加
☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>
77万6032円
<グァテマラ基金>
75万6725円
(2014年6月現在)